
異説御伽噺 「雪女」

神田白兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説御伽噺 「雪女」

【Nコード】

N0530K

【作者名】

神田白兔

【あらすじ】

雪の夜、男は決して話してはいけないと約束した話を、女房にしています。でも男には、もっと女房に話せない秘密がありました……。異説「雪女」、開幕。

女は赤子をあやしながら訊きました。

「あなたはいつも、雪の夜は物憂げになりますね」

「……そうかい？」

男はとぼけますが、その返答すら心ここにあらずでした。

「そうですね。貴方は昔っからそうですね。……雪の日に何か、思い出でもあるんですか？」

男は少し考えて、女と向き合いました。

「……ああ、そうだよ。……話そうか話さまいか悩んだが、やはりお前には話すべきだな」

男は、どこか悲しげな、何かに耐えるような瞳で、はかなく笑って語りました。

遠い昔の記憶。吹雪の夜の話を……

男は子供だった頃、父に連れられて山へ狩りに出かけました。

寒い寒い山の中、鹿を狙って鉄砲を構えますが、なかなか仕留めることができず、親子はどんどん山の奥まで入って行きました。

日がだいぶ傾いても、一頭も仕留めることができず、今日はもうあきらめて帰ろうかと思いました。その矢先、天気は崩れて、親子はひどい吹雪にあっつてしまいました。

前も後ろもろくに見えない吹雪の中、二人はとにかく雪をしのげる場所を探して歩きまわり、山の中にあつた炭焼き小屋を見つけ、その中で吹雪が止むのを、ただひたすらに待ちました。

けど、いつまでたっても吹雪はやまず、空気はどんどん冷え込んで、親子が抱き合っつて暖をとりますが、寒さは消えません。

……二人が山小屋にこもってから、どれくらいたった時でしょう。急に小屋の戸が音もなく開き、寒い風と雪が小屋を凍てつかせると同時に、一人の女が入ってきました。

それは、夢のように美しい女でした。

人の熱でとけそうな真っ白い肌に、濡れたように艶めく黒い髪、鮮やかな赤い唇、そして、愁いをおびた宝石のように煌めく瞳。男が今まで見たこともない美女が、そこにいました。

男はただ茫然と、その美しさを記憶に焼きつけようと、女を見つめていましたが、父親は寒さ以外の何かで、ひどく体を震わせて、女に鉄砲を向けました。

男は父の行動に驚き、とっさに父を突き飛ばしました。

父親は、息子のしたことを諫めることはできませんでした。

小屋に入ってきた女が、父親に向かってふうと息を吹きかけると、父親は氷漬けとなり、動かなくなってしまうたから。

男はこの時やっと、女は普通の人間ではない。恐ろしい何かだと気付きました。

腰を抜かして座り込む男に、女はゆっくり近づいて、尋ねました。「どうして、私を助けたの？」

その声は美しく、そして思っていたよりもずっと優しい声だったので、男はほんの少し安心して、答えました。

「……あなたが……、あまりにも綺麗だったから」
それは、とても正直な気持ちでした。男は女を恐ろしいと思いつつも、未だ目をそらさないのは、女の美しさに心を奪われたままだから。

女はほんの少し目を丸くして、それから笑いました。

母親のように、優しく温かく、笑いました。

「そう。……面白い子ね。私を助けてくれたお礼に、あなたは見逃してあげる。吹雪も止めて、村に返してあげる。」

でも、一つだけ約束をしないで。今日起こったこと、私のことは誰にも話してはいけませんよ。もし、誰かに話したら、私はあなたを殺さねばなりません」

最後の言葉を語る女の顔は、父を殺した時と同じ、氷のように冷たい表情をしてましたが、男がうなずくとまた、優しく微笑んでく

れました。

そして、女が小屋から去ってすぐ、ひどく吹き荒れていた吹雪は嘘のようにやみ、男は村に帰ることができました。

父親の死を多少尋ねられました。男は女との約束通り何も話さず、次第に忘れられてゆき、そして長い年月がたちました。

「だから、今でも雪の夜になると思いだすんだ。……あの日に出会った女、雪女のことを。

？　なあ、お前？　どうしたんだ？　何で、さっきからずっと黙ってるんだ？」

赤子を布団に寝かせ、男の話を聞いていた女は、話がひと段落ついても、相槌すら打たず、黙ったままなのを不思議に思い、男は尋ねます。

「……………約束を、破りましたね」
ぼつりと女は、咳きました。

三年近く連れ添った女房の声ではなく、遠い昔、山小屋出会った女の声で。

「誰にも話してはいけないと、言ったでしょう？」

女が立ち上がった瞬間、空気は冷えて、暖をとっていた庵の火も消えました。

「……………お前は……………あの時の……………」

「そう。私が、あの時の雪女。……………残念だね。話さなければ、ずっと一緒にいられたのに」

女は、ゆっくりゆっくり、座り込んだまま動けない男に近づきま。それも、初めて出会った時のように。

そして女は、人間ではありえない冷たさの手で、男の首に触れました。

冷たい指が十本、男の首を包み、その指に力を込める前に、女は口を開きました。

「何故、笑っているの？」

男は、笑っていました。

恐怖のあまり、気が狂ったのではなく、嬉しそうに、安心したように笑っていました。

「嬉しいんだよ。お前が、あの時の雪女で。」

俺はお前を愛していたが、本当にお前を愛していた自信はなかった。俺はずっと、あの時出会った雪女が忘れられず、お前はその雪女に似ているから、雪女の代わりに女房にしたのではないか、不安で仕方がなかった。お前と雪女が別人なら、俺はお前にひどすぎることをしたことになる。……だから、今、話したんだ。

誰かに話せば、本当に雪女が殺しに来るのなら、俺は、殺されるべきだと思ったんだ。……女房を、誰かの代わりにしか思っただった罰として。……でも、お前が雪女だったんだな。

俺はちゃんと、お前を愛していたんだな」

男は、本当に女には一生言えないと思っていたことを語り、満足そうに目を閉じました。もう、後悔することなど、何もないというように。

子供のころから、愛し続けた女に殺されることを、受け入れたように。

けれど、いつまでたっても指は力を込めず、父を凍らせた冷たい吐息もありません。

男は目を開け、尋ねました。

「……なあ、何でお前は、泣いているんだ？」

女は泣いていました。

女も、男のことを深く愛していたから。

あの日、子供だった男に助けられた時から、女はいつでも男のことばかりを考え、男が大人になった時、人間に化けて近づき、祝言をあげて夫婦となり、子供を産んだ……

それほどまでに、男を愛していたのに、女は自分から、男に昔の

話を振りました。

男が話してしまえば、自分は男を殺さなくてはならないのに、尋ねずにはいられませんでした。

自分は今でも、あの日のことを覚えているのに、あの日からずっと愛しているのに、男は自分が化けているとはいえ、人間の女と祝言をあげた。

男はあの日のことを忘れているのではないか、自分のことを美しいと言ってくれたのに、女房がああ時の女だと気付かずにいる男が、女は愛しているがゆえに、憎らしくてたまらなかつたのです。

けど、男はちゃんと覚えてくれていました。

自分がそうだとはいえ、男も愛しているのは、あの日出会った雪女でした。

「……殺せない。……あなたは、殺せない」

女は泣きながら、男から離れ、外へ駆け出しました。

「!? おい！ 待ってください！」

男は慌てて追いますが、急に吹き付けてきた冷たい風と雪が、男の行く手を阻みます。

「ごめんなさい！ 私も、あなたを心から愛しているけれど、もう一緒にいられません！ 雪女は、人間に正体を知られると、体が溶けてしまうの！」

「ごめんなさい！ 子供を、あの子をお願いします!!」

女は雪の中で叫び、姿を消しました。

視界を覆う雪の中から、最後に垣間見えたのは、泣きながら、それでも嬉しそうに、優しく微笑む女の顔でした。

それから、男は二度と、女と出会うことはありませんでした。

けれど、男が、もしくはその息子が、冬に山へ向かうと、どんなに天気が悪くても、必ず雪はやんで、空は晴れ渡るそうです。

まるで、誰かに見守られているかのように……

(後書き)

異説御伽噺シリーズ第五弾。

おとぎ話じゃなくって、怪談だということはスルー希望。

さまざまパターンがある雪女のお話ですが、一番よくある話を採用。昔から、話してはいけなのに訊いてくる雪女が不思議だったので、セルフ回答。

内容は美談っぽく書いては見たけれど、これってどっちも結構身勝手だな、と思ってしまうた。

色入りと突っ込みどころ満載の駄文ですが、最後まで読んでくださってありがとうございます。

できれば、感想もどうかお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0530k/>

異説御伽噺 「雪女」

2010年10月8日15時23分発行